

ハイブリッド・メディア環境における科学専門知

○早稲田大学

田中幹人

1 目的

現代の知は、マスメディアと、ソーシャルメディアに代表されるインターネットメディアが複雑に絡み合った、ハイブリッド・メディア・システム(Hybrid Media System)のなかで流通している(Chadwick, 2013)。これは、旧来の「科学コミュニケーション」論からすれば理想的な、フラットな情報空間である。しかし果たして、科学技術の専門知は、このハイブリッド・メディア空間の中でどのように流通し、また専門家はどのような専門的役割を果たしているのだろうか？本報告では、現代のメディア空間の中で、専門知／専門性が「相互作用の専門性(interactional expertise; Collins & Evans, 2008)」を如何にして発揮しているのか(あるいは、していないのか)を考える。

2 方法

本報告は科学とメディアの研究に取り組んできた発表者の研究チームの、これまでの研究を総括的に扱う。そのため分析対象事例、及び用いた方法論は多岐にわたるが、主要点について下記に述べる：対象とした科学 이슈は、東日本大震災後の多様な議論、JAXAの金星探査衛星「あかつき」の軌道再突入時の議論、ヒトパピローマウイルス・ワクチンを巡る議論などである。分析対象のデータとしては、マスメディアについては主に新聞各社のデータベースから得られる記事データを、ソーシャルメディアは SNS サービス「Twitter」を対象とし、API を通じて蒐集したデータを対象とした。これらを対象に、言説分析、フレーム分析、定量テキスト解析、ソーシャルネットワーク分析などを併用して分析を行った。

3 結果

ハイブリッド・メディア環境における科学 이슈議論に際し、専門家は状況依存的に社会的議論を統合する相互作用性(媒介性)も、あるいは分断させる媒介性をも持ち合わせていることが確認された。端的には、平時の科学コミュニケーションならびに有事のクライシスコミュニケーションにおいては知識の分配と解説における媒介作用、リスクコミュニケーション時には議論の媒介作用が認められた。しかし、その作用性については非常に対照的である：専門家の持つ専門知／専門性は、前者においてはおしなべて議論空間の統合作用を示すが、後者においては議論の分断(分極化)作用を示す傾向が観察された。

4 結論

現代のハイブリッド・メディア空間における科学 이슈議論の検討からは、専門家の持つ知識分配機能については一定の「成果」が認められるものの、社会における熟議作用の媒介者としての役割に関しては、むしろ阻害・分断要因となっていると思われる。この点において、「専門知と経験研究(Science : SEE)」論のように専門知を起点として社会的議論の有り様を記述しようという試みの限界を考慮せざるを得ない。一方で「欠如モデル」概念に代表される(批判的)規範理論についても、一定の妥当性は与えられるものの、状況依存的に専門知の議論参画の強度をどのように(そして誰が)操作しうるのかという点において、適用の範囲については留保を付けざるを得ないだろう。

文献

Chadwick A (2013) *The hybrid media system : politics and power*. Oxford University Press, USA.

Collins H and Evans R (2008) *Rethinking Expertise*. University of Chicago Press, USA.